
擬態

小島 榆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

擬態

【Nコード】

N4022U

【作者名】

小島 榆

【あらすじ】

私は惑星移住を研究している。近年は擬態に関してかなり成果をあげている。しかし、いちいち擬態の結果に文句をつける原住民が一人存在するのだ。

その星の上空から、私は地上を見おろした。周囲にある白色の浮遊物体にまぎれてゆらゆらしてみろ。だれも私には気づくまい。

隣の浮遊物体から声がした。

「博士、顔がにやけてます」

「にやけてない」

下っ端研究員に言い返す。

「サイズダウンの実験中なのだ。こうやって顔の上部をもちあげることによって、表面積を圧縮しているのだ」

私たちの本体はかなり大きい。だから移住先の星を見つけるのに苦労する。惑星の環境が適合してもサイズが合わなくて断念することが多い。それなら自分たちの体をサイズダウンするべきだというのが私の長年の主張だ。本拠地の大学で実験を重ね、現在は元のサイズの半分まで落とすことが可能になった。移住先の面積を考えるともう少し落としておきたいところだが、これでもかなりいける。研究費が倍増する日も近い。にやけて悪いか。自分、エライ。

ふと地上の小さな生物の視線を感じた。母親らしい生物が私を指差して言った。

「なんだか猫みたいな形の雲ね」

なんだ、猫というのは。

「そんなことないよ」

母親と手をつないだ子供らしい生物が言う。

「大きすぎる」

……言っただな。今に見ているがいい、原住民よ。私は下っ端研究員に向き直った。

「大学に帰る。研究の再開だ」

一年後、私と下っ端研究員は動物園という場所にいた。

「博士、鼻がモデルよりも長くなっています」

私はあわてて鼻の長さを調節した。

「どうだ」

「いいんじゃないでしょうか」

私たちがいるのは檻の中だ。本来の住人であるアフリカゾウ二頭には一時的に奥の飼育小屋で眠っていただいている。実験は短時間で終了させる予定だ。

「博士、対象が来ました！」

「よし、実験開始だ」

私たちは檻の外に鼻を向けた。今回の実験の目的はサイズダウンに加え、原住民に擬態を見破られないことである。うまくモデルにまぎれなければ移住先で排斥にあう可能性がある。

というわけで、まずは前回の実験で私にいちやもんをつけた子供を観察対象にすることにした。今回の私たちは完璧だ。アフリカゾウを見た気になるがよい。くつくつく。しばしの間、私は子供とじつと目を合わせた。

「お母さん、これなんて言うの？」

「アフリカゾウよ」

子供は眉根を寄せた。

「こんなに大きかったっけ？」

私は鼻から水を吸い上げた。この子供にかけてやっても罰はあたるまい。言うに事欠いて「大きい」とはなんだ。

「博士、落ち着いて、落ち着いて」

下っ端研究員がなだめるように鼻を寄せてきた。いかん、いかん。落ち着け自分。私は両耳をばたばたさせて、ゆっくり奥の小屋に向かった。

「大学に帰るぞ。すぐに研究続行だ」

「博士、それ、雪辱の間違いじゃ」

私は鼻先で下っ端研究員をこづいた。

それから私の実験は続いた。キリン、サイ、馬、羊、犬。今回は苦節十年にしてついにあの小面憎い原住民より確実に小さい生物に擬態することに成功した。

「なーう、なーう」

猫というこの生物は成長しても原住民のひざより小さい。このサイズの生物をして「大きい」とは言えまい。どうだ。ダンボール箱の中で私は鳴き声の練習を開始した。原住民の子供が毎日この道を通って学校から家まで帰宅するのは調査済みである。

子供は十年でずいぶん大きくなったようだ。昨年から母親の背丈を追い越した。最近、飼い犬のジョンをなくして落ち込んでいたと聞いている。下っ端研究員の報告にしんみりした後で、今回は実験を長期擬態に変更した。

「にゃあにゃあ鳴いてあやつの同情と傷心につけこんでだな、数ヶ月から数年の長期擬態実験を実施するのだ。飼い猫になつてしまえばこっちのもの……」

ひとりごちていると、少し離れた場所でぶち猫に擬態した下っ端研究員が注意を促してきた。

「博士、鳴き声が犬っぽいです」

は。最近やった犬の擬態の癖が出てしまったようだ。

足音が近づいてきて、私は後ろをちらつと見た。あの子供だ。まずい、犬の鳴き声が聞こえていなかっただろうか。ここはごまかさなくては。

「わうん、うーん」

「あれ、犬だと思ったんだけど、違ったのかな」

「うー、ふにゃあうん、にゃおん」

「猫だよな、こいつ」

そうそう。猫。今回は猫。

子供が私を抱えあげた。ブレザーの肩口に前足をのせられる。

「へんな泣き声してなかった、おまえ？」
してません。

「まさかね、だけど」

子供は私を正面からじっと見つめたあげく、なんと段ボール箱の中に戻しおった。

「おまえ、小さすぎ」

今まで散々大きすぎると言い続けたその口で、今度は小さいと言うのか、こやつ。私のひげはぶるぶると震えた。

大学の研究室に戻って私は熟考した。サイズというのはなかなかに難しい。もともとの目的が惑星移住にあわせたサイズダウンだったせいで、小さければよいと考えがちだった。しかし移住先に原住民がいる以上、彼らの中にまぎれなければならない。しかもできるだけ食物連鎖の上位に位置する生物のなかにまぎれるのが至上命題だ。それができれば研究費倍増。私は次のモデルを決めた。

前回の猫実験から三年がすぎたが、これは一概に実験の失敗をあらわすものではない。擬態後にモデルの社会に溶け込むには現地の習慣風俗政治経済の研究が今まで以上に必要だったのである。

「博士、いつそのこと親のない子供のふりでよかったんじゃないでしょうか」

「移住者が全員子供ではまずいだろう。大人にまぎれておけば新規移住者の受け入れノウハウを得やすい」

「でもこの地域で十八歳って大人か子供か微妙な年齢ですよー」「うるさい」

今回、私たちの擬態モデルはヒトである。社会的には大学生を装うことに決定した。数年の擬態実験をつづけて最終的には他の移住者の受け入れ先になる予定なのだ。ここ数週間で家もバイトも決めてきた。昨日は大学の書類をいじって正規の学生証を発行した。いきなり長時間の擬態はせずに、地道にこつこつ一日数時間からはじめている。

そしてついにこの日がやってきた。あの仇敵ともいえる子供にー

泡吹かせてやるのだ。

「一泡吹かせるって、講義の間となりにすわるだけなんですよね」
「うむ」

「ハードル低すぎやしませんか」

私はむっとして、下っ端研究員とのメールのやりとりを中断した。これまでどれだけあの子供に煮え湯をのまされてきたか思い返すがいい。十三年だ。子供もすっかり大人のような顔になっている。

私は子供の横顔を見つめた。もう子供とは言えないが、子供子供と呼びならわしてきたからなんと呼ぶべきか困惑する。まずは名前を聞いて、友達になって、長期の擬態でも正体が判明しないことを実証しないと研究費の増額がなあ。

来年の研究費について考えているうちに講義が終わったらしい。子供もテキスト類をまとめはじめている。早く声をかけなくては。思っているのに、喉が乾いて声が出ない。私ともあるうものが緊張してきたようだ。子供から視線をはずせないでいると、ふいに子供が顔を寄せてささやいた。

「ばれてるよ」

まさか。ばれているのは何なのだ。私の正体なのか、身分なのか、それとも私の感情か。私は急激に体温の上昇した顔を両手で覆った。

(後書き)

どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4022u/>

擬態

2011年8月15日03時12分発行